

法学部

問 1

システムがリスクを引き起こしている近代社会において、顧みるべき責任とは、システムに組み込まれた「外部から割り当てられた責任」ではなく、システムに支配されない「人間の内面から生じる内発的な責任」である。これは、近代社会システムによって決められている有限責任の考え方とは異なり、責任の本質を本来無限定のものとして理解し、法律や規則のように言語化されたものではない「何か」に対して、他者の呼びかけに応えたり、自分自身を基準に判断したりできるような倫理としての無限責任であり、システムの暴走を止められる。

法学部

問 2

システムによるリスク対応は、リスクに十分対応できないというだけでなく、想定外のリスクが発生したときに民主主義を否定する方向へ動く可能性を内包している。リスクに対応するためには民主的議論よりも迅速な対応が求められるため、私権の制限もやむを得なくなり、システムは権力に対する抑止力を失って全体主義化してしまう。リスクに対して個人でなく社会的に対処するシステムとして、管理は有限責任による組織化をもたらす。

法学部

問3 (その1)

私の所属するサッカー部は、県内有数の強豪校だが、監督の指示による過度な練習ノルマと、それに黙々と従うチームの雰囲気強い違和感があった。選手は故障ギリギリまで追い詰められているが、「嫌なら代われ」と翌日からメンバーを外されることを恐れて誰も異を唱えない。コーチに訴えたこともあったが、「気持ちはわからなくもないが、監督さんの指導のおかげで全国大会にも出場できている」と諭された。そして私は、自分自身をそのコーチの言葉で納得させ、以来何も言わなかった。

ここでの私は、部活というシステムの中で、「顧問やコーチの指示に従う」「選手として大会を勝ち上がる」という有限の責任を割り当てられ、それに従う立場になっていた。この場合、監督やコーチに異を唱えることは「無責任」となる。そして、我がサッカー部は、強豪校としての伝統や指導スタイルを固持することで、思考を停止する「凡庸な悪」と化していた。

だが、無限責任の観点から捉え直せば、この時の私の「責任」とは、「痛みに耐え、選手生命を危うくしている仲間からの無言の呼びかけに応答 (responsibility) すること」であったはずだ。そして、自己の倫理を発動させ、この部の未来に対する責任を持つという意識があれば、選手個人が負うべきリスクを超えている今の状況を打開し、閉塞した部を再編成するために、対話を試みる余地があったはずだと痛感している。

法学部

問3 (その2)

福島第一原発事故に関して、避難生活などによる損害賠償を求める住民たちの訴訟が何件も起きた。ところが、東京電力の責任は認められても、国については「敷地の高さを超える津波の到来を予見できなかったから、防潮堤の設置などを求めなかったとしても責任はない」とする最高裁判決が出た。私は「規制が不十分だったのに国の責任がないなんて」と疑問を感じたが、「過失とはそういう制度なのか」と納得してしまう自分もいた。

ふり返ると、近代社会は科学技術の高度化の中で大量に電気を生産し消費する巨大システムで、それを成立させるため外部から割り当てられた責任が過失だ。過失がなければ政治家や官僚、専門家は規制のあり方が是認されたと見なし、反省もなくリスクを高める。

たとえ国が法的責任を負っても、私たち国民一人一人はその限りの責任で済まされてよいかという問題が残る。というのも、私を含め都市住民は電気を消費するのみで、高リスクの原発を人口の少ない地方に押しつける構図があるからだ。そこからどう脱するかを自ら思考し応答する内発的な責任が存在する。

学者や官僚も国民自身もそのことを自らの倫理として問わずに凡庸な悪を決め込む。それどころか、「AI社会を支えるデータセンター建設など大電力消費時代がやってくる」、「原発や再エネのベストミックスを」という大合唱の前に口をつぐむことになる。それこそ、民主主義が全体主義に転じた状況だ。

法学部

問3 (その3)

ここ数年SNSを中心に、埼玉県川口市やその周辺で「クルド人による治安悪化」や「クルド人は犯罪者集団」といった「リスク」が叫ばれ、「不法滞在の外国人を強制送還すべきだ」という声が多く流れるようになった。

このような社会の風潮に対して、私は、一口に「クルド人」と言っても、近代国家におけるシステムとしての国籍も多様で、自国での迫害から逃れて日本で難民申請をしている人や在留資格を得て事業を営む人や日本で生まれ育った子どもたちなどその状況は様々で、一括りにするのはおかしいと感じてもやもやした。私自身は川口市や周辺の住民ではないし、当事者でもないので、この「リスク」に疑問を呈する発言に「いいね」を付けることで自分の責任は果たしたと考えていた。

しかし、「クルド人は犯罪者集団」といった主張を見過ごすことは、外部から割り当てられた責任は果たしてはいても、「凡庸な悪」であり、自らの思考を停止しているのではないか。このような外国人排斥は人間として許されないことであり、人間の内面から生じる内発的な責任として、自分自身を基準とした行動を貫くべきではないか。外国人排斥の根拠のない主張を見かけても、住民や当事者ではないので反論の必要はないという有限責任の考え方は、人権が侵害されているということそのものへの応答という無限責任を不可視化するもので許されない。私はそのとき外国人排斥に反対する意見を表明すべきだった。

法学部

問3 (その4)

戦後80年、アジア・太平洋戦争を直接に体験した日本人はごく僅かとなり、戦後生まれの人びとが「戦争責任」「戦後責任」を問う動きは、言論界でもマスメディアでもほとんど見られなくなっている。家族の中で戦争体験が言い伝えられることもないし、自分が直接関わっていないことに責任を感じるはずもない。疑問をもたずに私がこういう風潮に身を置くことは「凡庸な悪」なのだろう。

なるほど、日常生活のなかでそういう類の「責任」との接点を見出すことは不可能だ。過去の責任はすでに果たされたのであって、未来にその責任は及ぶべくもないという立場は有限責任の考え方だ。上の凡庸な悪はここから生じたものだろう。

日本社会のこうしたあり方に対しては、たえず批判が向けられ、戦後の私たちの世代はやはり今なお責任があるのだと考えなくてはならない。直接に戦争に手を染めたわけではない世代が、どうして責任を引き受けなくてはならないのかという反論があるかもしれないが、いま、そしてこれから平和な日常生活を営むことが可能となるのは、たえず過去を振り返り、このような責任を負うことによるのみである。15年に及ぶかつての戦争の経験をたえず省みることによってそれは可能となるのだろう。